

安土城書院の狩野永徳筆「三上山図」

小寄
善通

Title :

“Mikamiyama-zu” painted in the Shoin at Azuchi Castle by Kano Eitoku

Summary :

This paper is a study of the Wall Paintings “Mikamiyama-zu” painted in the Shoin at Azuchi Castle by Kano Eitoku.

小奇 善通

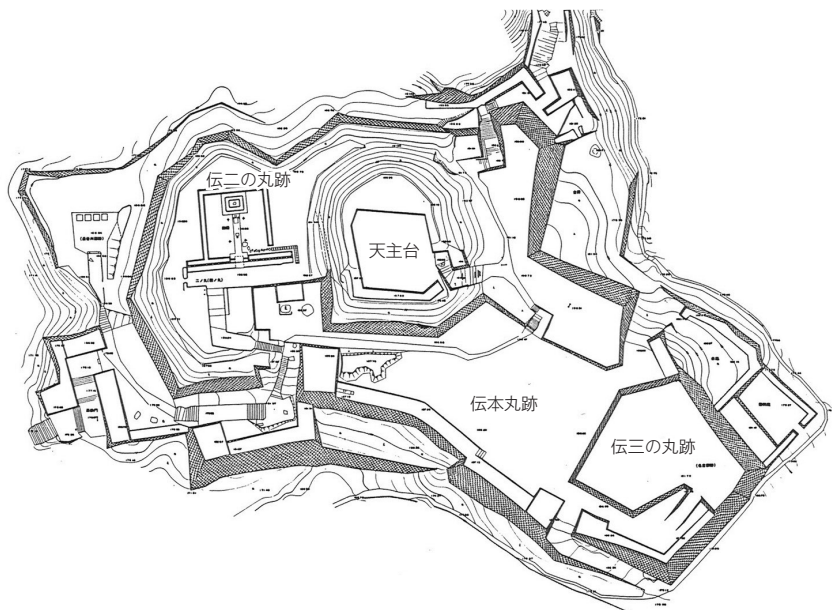
天正十年（一五八二）六月十四日、安土城は山上の天主、本丸を中心とする織田信長の居城部分および安土山下の町々を焼失した。本格的な天主を有する織田信長の居城であったということで注目度が高い一方、天正四年の築城開始からたった六年後の炎上ということで、安土城には不明な点が多に多い。ここでは安土城障壁画のうち、『丹青若木集』が記す、狩野永徳筆「三上山図」が描かれた書院の位置について考察を進めてみたい。

第一章 安土城の御殿と襖絵

まず、安土城に存在した諸御殿について、『信長公記』から関連部分を抜粋してみよう。天正四年の築城開始以降、御殿関係の記事として最初に出てくるのが、次の天正六年正月朔日条である。信長が完成した御殿を観覧させるために家臣を御殿御座所へ集めた記事である。

（前略）其後御殿御座所迄皆見せさせられ、三国の名所を狩野永徳に仰付けられ、濃絵に移され、（後略）

これによると、天正六年正月の段階で、御殿御座所が完成して



安土城跡 平面図

おり、そこには永徳の描いた濃彩の三国名所図が描かれていたことが判明する。この三国については『信長公記』の他の箇所
の記述から尾張、美濃、近江とする説^(註)をはじめ、山城、
近江、大和(あるいは摂津)とする説や、日本、中国、天竺(あ
るいは朝鮮)など海外の諸国を想定する大胆な説も古くから唱
えられている。

このあと御殿の記事が確認されるのは、次の天正十年正月朔
日条である。

(前略) おもての御門より三の御門の内、御殿主の下、御
白洲まで祇候仕り、爰にて面々御詞を加へられ、(中略)
各階道をあがり、御座敷の内へめされ、忝くも御幸の御間
拝見なさせられ候なり。御馬廻・甲賀衆など御白洲へめさ
れ、暫時逗留の処、御白洲にて皆々ひゑ候はんの間、南殿
へ罷上り、江雲寺御殿を見物仕候へと上意にて、拝見申候
なり。

御座敷惣金、間毎に狩野永徳仰付けられ、色々様々あらゆ
る所の写絵筆に尽くさせられ、其上四方の景気、山海・田
藪・郷里、言語道断面白き地景申すに計りなし。是より御
廊下続きに参り、御幸の御間拝見仕候へと御錠にて、かけ
まくも忝き、一天君・万乗の主の御座御殿へ召上せられ、
拝濫に及ぶ事、有難く、誠に生前の思ひ出なり。御廊下よ
り御幸の御間、元来檜皮葺、金物日に光り、殿中悉く惣金
なり。何れも四方御張付け、地を金に置上げなり。金具所

は悉く黄金を以て仰付けられ、斜粉をつかせ、唐草を地ぼりに、天井は組入れ、上もか、やき下も輝き、心も詞も及ばれず。御畳、備後表、上々に青目なり。高麗縁、雲絹縁、正面より二間の奥に、皇居の間と覺しくて、御簾の内に一段高く、金を以て瑩立、光耀き、衣香当を撥四方に薫じ、御結構の所あり。東へ続ひて御座敷、幾間もこれあり。爰には御張付、惣金の上に色絵に様々か、せられ、御幸の間拝見の後、初めて参り候御白洲へ罷下り候（後略）

これは、天正十年正月に城完成のお披露目として家臣を呼び寄せ、御座敷内の御幸の間やその中にある皇居の間、南殿や江雲寺御殿を観覽させた記事である。天皇の行幸のために建てられたとする御幸の間や皇居の間は金碧画で彩られ、そこから廊下続きに接する江雲寺御殿の諸室もやはり金碧画であり、そこには狩野永徳による名所絵の数々が描かれていたとされる。

この間、『信長公記』によると、天正七年五月十一日には信長は完成した天主に移り、天正九年九月八日には築城に関わった諸職人に褒美として小袖を与えている。この中には障壁面制作を担当した狩野永徳、光信父子の名も記される。

次に、宣教師ルイス・フロイスの記述になる『フロイス日本史』の記事を見てみよう。天正九年三月にあたる記事（註²）に、信長は、この城の一つの側に廊下で互いに続いた、自分の邸とは別の宮殿を造営したが、それは彼の（邸）よりもはるかに入念、かつ華美に造られていた

とある。『信長公記』の記事と合わせ読むと、天正六年に家臣に披露した御殿御座所が彼の邸で、「廊下で互いに続いた、自分の邸とは別の宮殿」が天正十年に家臣に披露した御殿群であると想定できる。濃彩の障壁画であった御殿御座所に対し、御殿群にはより華麗な金碧画が描かれていたとする『信長公記』の記載も、この『フロイス日本史』の記事と符合する。

ところで、これらの御殿は安土山上のどこに建てられていたのであろうか。ここで重要な示唆を与えてくれるのが、先の『フロイス日本史』の記事のなかの「この城の一つの側に」という文言である。安土山上の地形をみると、建築可能な平坦地は東西にやや細長く、そのほぼ中心に天主台が築かれている。このことから考えると、『フロイス日本史』では天主を中心に建物配置が記述されているものと判断できる。「一つの側」という文言をわざわざ用いているということは、つまり、信長邸と、それとは別の宮殿とは天主を挟んだ異なる側に配置されていたことを意味しよう。近年の発掘調査によると、天主東側の伝本丸御殿跡から、御所の清涼殿に匹敵する遺構が確認されている（註³）。また、敷地の広さから見ても、廊下でつながれた諸御殿を配置できるのは、天主東側の伝本丸跡及び伝三の丸跡以外にはありえない。

つまり、安土の山上には天主を中央にして東側に御幸の間や皇居の間を擁する御殿と南殿、江雲寺御殿、西側の伝二の丸跡に信長の邸である御殿御座所が存在したことになる。現在、天

主台西側には信長の御廟があるため発掘調査は実施されていないが、そこにはまさしく信長の御殿御座所があったことになる。

第二章 狩野永徳の三上山図

狩野一溪重良（一五九九～一六六二）が記した『丹青若木集』の狩野永徳の項の記事には、永徳が描いた安土城の襖絵に関する興味深い記述が含まれている。現存する最も古い写本は幕末期のもので写し誤りも多く、文意が辿りにくい所もある。次に掲げた全文は国会図書館本による。

源四郎尚信者松永法眼之家嫡所絵強厚而筆力揺動起飯廻絶非所逮言舌氣韻生動出于天成自早年丹青超越于父遠甚以是狩野中興為名手矣平信長卿近州安土山令築一城狩野一家図繪之其至于書院中鑑監三上山事專令造此画図者命源四郎尚信一之間者模写彼山昼終日詠覽真山夜者戸障子昼図有之半開詠則真山尾崎障子之絵書繼之信長卿感深之擢法印号永徳近世神品昼工是也惜哉四十有七歳而慶長二丁酉九月十四日死

これについては辻惟雄氏の研究^(註4)があり、要約すると次のような内容であろうと解釈されている。

安土城の書院一の間障壁画は織田信長が狩野永徳に命じたもので、三上山が描かれている。昼間、戸障子を開ければ実際の三上山を見ることができ、夜、戸障子を閉じれば画図の三上山

を鑑賞できる。昼間、半ば戸障子を開ければ実際の三上山が見え、画図がそれをつないで唐崎あたりまでの景観を楽しむことができる。

安土山から見える三上山から唐崎あたりにかけての景観をパノラミックに描くだけでなく、実景とオーバーラップさせるという奇抜な手法であったようである。

永徳と信長との出会いは、これ以前、上杉家本洛中洛外図を信長が入手した時に遡ろう。この時信長は永徳の描く現実感豊かなパノラミックな名所景観図にいたく共感したに違いない。先に記した御殿御座所や江雲寺御殿に数々の名所絵を描かせていることや安土城図屏風を描かせたことでもそれは理解できる。そして、安土城の書院ではそれをさらに進めて虚と実を交錯させる仕掛けを工夫したのである。永徳の作風は一般的にはモチーフを豪快かつ巨大に描くことで知られているが、安土城築城当時はそれとはまったく違った点で信長から評価を受けていたように考えられる。

ところで、この三上山が描かれた書院とは安土山上の諸御殿のどの建物を指すのであろうか。これについても既に前述の辻氏が天主西側にあったであろう建物とする見解^(註5)を提出されている。当時の安土山上の建物配置を想定して、三上山を眺めることが可能な場所、という観点から導かれた結論である。現在でも安土山に登ると天主台の石垣上から南西の方角に三上山を望むことができるが、当時の安土山上主郭部において、天

主以外で三上山が眺められる場所は、現在信長の御廟のある天主台西側以外、やはり考えられないであろう。その場所にあった建物とは先に確認したとおり、信長の日常の居所である御殿御座所であった。そしてそこには『信長公記』によると永徳による濃彩の三国名所図が描かれていたのである。従来の研究では、三上山図が描かれた建物と、三国名所図が描かれた建物は異なるもの、という見解^{〔註6〕}が一般的であるが、『信長公記』と『フロイス日本史』の記載や、三上山の眺望状況を勘案すれば、三上山図が描かれた障壁画は三国名所図の内の一図ということになる。書院（御殿御座所）一の間が三上山図を含む近江名所図であったということになると、他の二国がそれに続く二の間、三の間に描かれていたことになる。その二つの国とは、既に信長の支配下にあった美濃、尾張とも考えられるし、あるいは天下統一に際しての重要拠点である京、大坂であったと考えるとさらに興味深い。

第三章 狩野派による近江名所図

近江を描いた最古の絵画作例としては平安時代末期の国宝源氏物語絵巻の関屋がある。画面上方に琵琶湖が描かれる。このあと中世の絵巻物にも琵琶湖が描かれる作例が認められるが、パノラミックに景観を捉える作例においては、そのいずれもが南方あるいは陸側から琵琶湖を捉えている。すなわち、東海道

からの視点である。先に見た永徳の三上山図を含む近江名所図はその点異例である。北方から手前に琵琶湖を介して南近江を捉えていたと考えられるからである。永徳による新図様であったわけであるが、何よりも信長の安土城築城によって得られた新たな視点ということができよう。

既に失われてしまった安土城御殿御座所に描かれた永徳の近江名所図ではあるが、はたしてどのような図様であったのだろうか。これを知る手がかりとしては、一つには滋賀県立近代美術館が所有する「近江名所図」屏風があげられる。この作品の制作年代はちょうど安土城築城と前後するころと考えられ、作者も狩野永徳あるいはその周辺画人である。三井寺あたりから右方に坂本、堅田、高島あたりまでをやはりパノラミックに描いた濃彩による作例で、画面手前には琵琶湖が描かれている。安土城あたりからの視点と考えると矛盾のない作例である。また、サントリ美術館が所有する「近江名所図」屏風も時代は下がるものの、やはり琵琶湖南岸を北方から捉えた構図を持ち、三上山や瀬田、大津、唐崎、堅田あたりを描き込んでいる。江戸時代初期の制作であり、金碧画である点は相違するが、左隻左方に安土城と考えられる城跡の石垣が描き込まれている点も興味深い。永徳の描いた近江名所図の図様が粉本として狩野派内に伝来し、それをもとに描かれた可能性も考えられる作例といえよう。

近世に入っても近江を描く絵画は枚挙にいとまがない。近江

八景図が成立するからである。しかしながら、八景に漏れた三上山はその後描かれることが少なくなり、永徳の新図様もやがて狩野派内でも忘れられることとなったようである。

本稿では、安土城の諸御殿の配置を近年の発掘成果を参考にしたうえで、『フロイス日本史』の記事と合わせ検証した。そのうえで、永徳による三上山図の描かれた御殿とその位置の確認を試みた。いずれ現存しない建築と絵画であるが、安土城のイメージの輪郭が少しでも確かなものとなれば幸いである。

註

1. 辻惟雄『戦国時代狩野派の研究』（吉川弘文館 平成六年）所収「永徳の三上山真景図について」の補記
2. 『フロイス日本史5』第五章（中央公論社 昭和五三年）
3. 木戸雅寿「よみがえる安土城」歴史文化ライブラリー 一六七 吉川弘文館 平成十五年
4. 辻惟雄「永徳の三上山真景図について」『美術史学』二 昭和五四年
5. 註四論文
6. 武田恒夫『狩野派絵画史』吉川弘文館 平成七年

成安造形大学附属近江学研究所紀要 第3号

発行日 平成26年3月24日

発 行 学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属近江学研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話 077-574-2118

発行者 木村 至宏

編 集 成安造形大学附属近江学研究所

印刷所 宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2014

ISSN 2186-6937